

# 落葉

世阿弥作

前

ワキ 旅僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 落葉の宮

地は 山城

季は 十月

「波と草とにかはれども。く。枕や同じかるらん。

「是は一所不住の僧にて候。我此程は北国に候ひしが。越路の雪積らぬ先に。都に上らばやと思ひ候。

「草枕。夕べくの旅衣。く。野山の露に敷きそめし。行方を問へば秋暮れて。時雨も廻る日数へて。都も近き浅茅生の。小野の山路に着きにけり。く。

「げにく此処は古へ小野の尼と申し人。初瀬に

詣で給ひし時。宇治の里にて浮舟とやらんに行き逢ひ。誘なひて住み給ひけるが。此処にては手習の君とかや申せしとなり。痛はしやさもやごとなき御事なれども。恋路の末のはかなきゆゑ。かゝる山家に住み給ふ事よ。成仏得脱せしめ給へ。シテ詞「なふくあれなる御僧。手習の君とのみ回向し給ひ候ふか。

「さん候処から思ひ出でたるまゝ御跡を弔ひ申し

候。

シテ「うたてやな同じ物語の内に。落葉の宮の御事も此  
処にて候ふ物を。何とて回向し給はで。其儘御通  
り候ふぞ。」

ワキ「げに／＼落葉の宮の御事も。承り及びて候。さて  
／＼御跡は何くの程にて候ふぞ。」

シテ「こなたへ入らせ給へとて。」

下歌「片山の陰唄づたひ。岩根木がくれ行く道の。げに

も落葉に。埋もれて跡は残らず。

上歌「稀に来る。夜半も淋しき松風を。／＼。絶えず

や苔の下に聞く。古宮のさびしきは。其色としも  
なかりけり。真木たつ山の秋の暮。さぞな奥山に。

紅葉ふみ分け鳴く鹿の。声聞きわびて憂かるらん  
と。物凄の夕べやな。あら物すごの夕べやな。

シテ詞「是こそ落葉の宮の御旧跡にて候へ。」

ワキ「げに／＼星霜旧りたる古宮の有様。誠に故ある処

と見えて候。又惟喬の親王の皇居は何くにて候ふぞ。

シテ「是より北に当つて松の一むら木高き処の見えたるこそ。文徳第一の皇子。惟喬親王の皇居にて候ふ御入り候へ。彼在原の業平参り。忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや。

地「雪踏み分けて君を見んとはと詠ぜしも。此処にての事なるべし。あはれも深き御跡なれば。たゞに

な詠め給ひそとよ。

ワキ詞「又是より東に当つて杉一村の見えたる山は候。

シテ「あれこそ都より雲の八重立つとながめけん。横川の峰にて候へ。

ワキ「げに面白や名所とて。猶奥ふかき細道を。

シテ「分けつゝ行けば末絶えて。

ワキ「煙ほのかに立ちのぼるは。

シテ「人家にもあらず。

ワキ 「松にも。

シテ 「あらで。

歌

「炭竈に。薪取り焼く夕暮は。く。おのれけぶ  
たき煙の。胸よりくゆる我思ひ。身を木枯に誘は  
るゝ。落葉の宮は我なりと。夕霜に色朽ちて。散  
りまよひつゝ失せにけり。く。 (中人)

ワキ歌

「小野の篠原秋更けて。く。露霜さむき古宮の。  
亡き跡とへば涙をも。月や昔に返すらん。く。

後ジテ

「あら淋しの深山の秋の夜や。梟松桂の枝に鳴き。  
狐蘭菊の花に隠るなる。月更け過ぐる物凄さよ。

ワキ

「不思議やな焼物ほのかに打ちかをる。衣の音なひ  
聞ゆるは。袖も色濃き落葉の宮の。重ねてま見え  
給へるか。

シテ

「中々なれや落葉の霜の。古人ながら執心は。

ワキ

「猶晴れやらぬ夕霧の。

シテ

「海山つらき生死の。

ワキ 「二つの道にかへすなよ。

地次第 「落葉のつもる罪科を。く。払ひて塵となさうよ。

クリ 「それ春風桃李花の開くる日。秋露梧桐葉の落つる時。

シテサシ 「中にも此落葉の宮と申すは。

地 「女三の宮と枝を連れし。女二の宮の御事なり。其頃時めく柏木の。衛門の督と申しゝ人。落葉の露を置きながら。女三の宮を思ふかと。憂かりし人

の言の葉に。

クセ 「もろかづら。落葉を何に拾ひけん。名は睦ましきかざしなれどもと。詠ぜし故の御名なり。去る程に此宮の御母。物の氣にいたく悩みて。知る処ありとて。落葉の宮も諸共に。此山里に住み給ひ。いと物あはれなりしに。夕霧の大将の。忍びて通ひおはせしが。行く馬にも足引の。山路といひ秋といひ。淋しさゝぞと山住の。こと語らへば程も

なく。日も夕暮になりぬれど。帰らんとだにし給はで。

シテ「山里の。あはれを添ふる夕霧の。

地「立ち出でん方もなき。心地して口ずさみ。籬の鹿も虫の音も。涙もよほす滝の音。名のみ音なしの滝つ波も。あやにくに音するや。物思へとの秋の空。時雨も袖訪ひて。山風いたく身にしめば。夜や暁になりぬらんと。大将は此山を。すごくと

別れ出で給ふ。

地「横笛の。（序の舞）

シテワカ「横笛の。調べは殊に変らぬを。

地「空しくなりし音こそ尽きせね。音こそつきせね。く。

シテ「もとより此身は落葉衣の。袖をひるがへし。

地「嵐も木枯も。

シテ「はげしき空なるに。

地「さやけき月に妄執の夕霧。身一つに降りかゝり。

目も紅の落葉の宮は。せんかた涙に咽びけり。

シテ「されども逆縁の御法を受けて。

地「されども逆縁の御法を受けて。罪科も脆き落葉

の音は。ほろくはらくと。時雨にまじりて行

く雲の。棚引く山より明け渡れば。時雨と聞き

しも跡絶えて。落葉と聞きしもあとはかなくて。

山風ばかりや残るらん。